

## II 各分担研究報告のまとめ

(資料1～5)

厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

資料 1. (分担研究者報告書 1)

家族教育と専門職教育を同時に行う発達支援モデル教室の運営

主任研究者 高田 哲 神戸大学 医学部保健学科 教授

研究協力者 山根弘子 NPO法人ほっと代表

松井学洋 神戸大学大学院医学系研究科保健学専攻

山本暁生 神戸大学大学院医学系研究科保健学専攻

研究要旨：平成 17 年 9 月に、神戸市東部（灘区）に発達障害のある子どもとその家族を対象とした二つの発達支援モデル教室（「ぽっとらっく」、「ほっと」）を開設した。「ぽっとらっく」は子どもたちへの支援とともに家族教育と保育士などの専門職者への教育研修を目的としている。一方、「ほっと」は個々の子どもたちの能力を伸ばし、家族自身が子どもの状態に適した環境を提供できることを目指した。両方の教室は、お互いに協力をしながら、各々の特徴を生かした活動を進めてきた。平成 19 年 9 月には、神戸市と協力して神戸市西部（須磨区）にも新たな教室（「すまいるぽっとらっく」、「すまいるほっと」）を開設した。

「ぽっとらっく」の 3 年間で教室開催回数は灘区と須磨区を合わせて 36 回であった。参加者数は、平成 19 年度だけで、延べ 1,000 名を超えた。発達支援教室「ぽっとらっく」のプログラムは子どもプログラムと講習会プログラムから成り立っている。毎回、15-25 組の家族と、25-50 名の保育士、保健師及びこれらの専門職をめざす学生、大学院生などからなる支援者が加わった。

個別発達支援教室「ほっと」では、TEACCH 訓練法を基礎に指導にあたった。灘、須磨両地区において、3 年間で 118 回、計 28 名の子どもを指導した。「ほっと」では子どもの発達段階と興味に合わせた課題を用意しており、手作り教材の開発にも努めてきた。15 回のセッション終了後では、受講した子どもたちの認知力の明らかな向上が認められた。「ほっと」でも、毎回 2-5 名の研修者を専門職者、大学院生の中から受け入れており、個別指導のできる人材育成を行ってきた。また、ソーシャルストーリー作りなどによって、家族が子どもの状況に適切に対処し、一人ひとりに合った環境整備を行なえるように指導した。

発達支援教室の活動は、子どもたちと家族だけではなく、専門職教育、支援者養成にも有用であった。これまでのモデル教室の経験をもとに発達支援教室運営マニュアルを作成したが、地域の実情に合わせてカスタマイズして利用すれば各地域で活用が可能と考えられた。

- I. 発達支援モデル教室「ぽっとらっく」 効果が明らかとなりつつある。自閉症を中心とする広汎性発達障害の子どもたちは、「こ  
A. 研究目的 とぼの遅れ」を乳幼児健診で指摘されること  
発達障害に対する理解が深まるにつれ、早 が多い。しかし、多くの家族は 2 歳までに「視  
期診断・早期支援が子ども達の発達に及ぼす

線が合わない」、「名前を呼んでも振り向かない」、「模倣行動がみられない」などの子どもの発達上の問題に気づいている。

保健師は、乳幼児健診で発達障害が疑われる例にしばしば遭遇する。兵庫県下で乳幼児健診に携わる保健師を対象に行なった私たちの調査によれば、96.0%の保健師が、乳幼児健診で発達障害のある児を経験していた。しかし、2歳前後の子どもの症状は不安定で、発達とともにその特徴がしばしば変化していく。多くの保健師は自分自身の発達障害に対する知識不足と家族との信頼関係の構築に悩んでいた。また、時には、家族自身が子どもの発達上の問題を受け入れないことにいらだちを感じたりしていた。このような経験は、乳幼児期から子どもと接触する機会の多い保育士にも共通している。

一方で 発達障害のある子どもの家族からは、保健師や保育士の何気ない一言で大きく傷ついたとの発言もしばしば寄せられている。家族や専門職者から共通して聞かれるのは、発達障害に関する知識や対応法を幅広く学んだり、お互いの悩みを語り合う場所がないということであった。

本研究班では、2-6歳の就学前の発達障害児を対象に保健師や保育士などの専門職教育と家族教育をともに行なう発達支援モデル教室を設立した。教室は、家族と専門職への教育を主目的とする発達支援教室「ぼっとらっく」と個々の子どもたちの能力を促すことを主目的とする個別発達支援教室「ほっと」との2種類とした。本報告書では、これらの教室の3年間の活動を報告する。

## B. 方法

### 1. 教室の概要

平成17年9月に神戸大学子育て支援施設「あーち」内に発達支援教室「ぼっとらっく」を開設した。その後、11月には、講習プログラムを隣接する灘区民ホールで開催するようにし、子どもプログラムと場所を分けた。これは、家族が子どもと離れてゆったりとした気持で交流ができるようにするためである。

平成19年9月に、神戸市の協力を得て、須磨区の統廃合になった小学校の跡地「すまいるプラザ大黒」に新たに教室を設置した(図1)。

現在は、神戸市東部(灘区)と西部(須磨区)の2か所で教室を運営しており、各々の発達支援教室は「灘ぼっとらっく」、「すまいるぼっとらっく」と呼ばれている。一方、同じ施設内にて開設している個別発達支援教室は「なだほっと」、「すまいるほっと」と呼ばれている。

図1 小学校跡地を利用した試み

(発達障害のある子どもと家族の支援プログラム)

厚生労働省発達障害者支援体制整備事業に採択



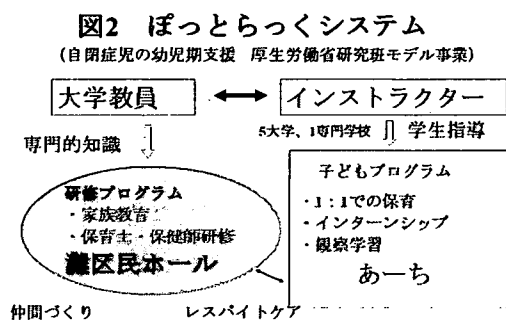
熟年ボランティア、高校生も  
家族と共に学ぶ。

体育館を使った活動

### 2. ぼっとらっく教室の内容

「すまいるぼっとらっく」は、毎月第1土曜日の午後、「灘ぼっとらっく」は、毎月第3土曜日の午後で開催してきた。これは、家族や専門職者、支援者(ボランティア)が参加しやすいためである。

教室の内容は、保護者・専門職者向けの講習会プログラムと子どもプログラムに分かれており、両者を同じ時間に行なうようにした。子どもがプログラムに参加している間に、家族は専門職者と一緒に講習プログラムに参加するようにした。(図2)。家族にとっては仲間づくりの場であり、レスパイトケアの時間となるようにしている。



### 3. 対象

対象は、2～6歳の就学前の子どもとその家族で、発達障害の診断を既に受けている子どもだけではなく、疑いのある子ども達も受け入れた。「すまいるぽっとらっく」では、半数を須磨区保健センターで要フォローと判定した児とし、保健センターとの関係が緊密になるように図った。

参加者には、ホームページを通じて毎回案内と募集を行なった。「難ぽっとらっく」、「すまいるぽっとらっく」とも各々の教室のホームページを開設しており、参加希望者は次回の講習予定がアップされるとその概要を見て参加を決めていた。参加を希望した時には、申込用紙をダウンロードし、FAX または郵送にて事務局に申し込んだ(図3)。また、市町村保健センター、病院、保育園など関係機関にも教室の案内を配布し、参加者の募集を行なった。

The image shows a sample of the application form (申込用紙). It is a structured form with several sections for personal information, contact details, and program preferences. The title at the top is '参加申込用紙' (Application Form). The form includes fields for name, address, phone number, and email, as well as checkboxes for program selection and consent.

図3 実際の申込用紙

子どもプログラムの受付人数は20人までとしたが、参加希望者が多いため早い時期に申し込みを断らなければならない状況が続いたので、初めての申込者を優先するようにした。12回以上参加の家族には、むしろピアサポーターとして、支援者としての役割を依頼している。

### 4. 実施状況

「難ぽっとらっく」の3年間の実施回数は29回で、保護者の参加人数は、毎回25～30人、保育士、保健師及びこれらの専門職をめざす学生、大学院生などの参加は30～40人であった。

「すまいるぽっとらっく」は平成19年9月にオープンとなり、以後7回開催したが、子どもの参加人数は同じように20名迄にとどめた。しかし、地域の子育てネットワークのメンバーが講習に参加したため、支援者の数は40名～50名と多くなった。

### 5. 講演プログラム

講習プログラムでは、医療、教育、福祉、芸術にまたがった幅広い分野から講師を招聘し、グループ討議、共同作業、自由討論を組み合わせ合計2時間のプログラムとした。毎回、家族の希望を取ったが、具体的な支援につながる内容へ

の希望が多かった。

## 6. 子どもプログラム

子どもプログラムでは、神戸市近隣の5つの大学より学生、大学院生が参加した。臨床心理士、保健師、作業療法士など将来専門職者として働く学生を1:1の割合で子どもの介助者とし、障害児通園施設の保育士、作業療法士、保健師として5-15年の経験を有するインストラクターが各自4-5名の学生を指導した。

子どもプログラムでは、あらかじめいくつかの設定遊びを用意した。動きやすく広いスペースを用意するとともに、パーティションでコーナーを区切り、一つの遊びに子どもが集中できるように工夫した。



図4. すまいる・ぽっとらつく  
(子どもプログラム)

## 7. スタッフの配置

スタッフとしては、医師、保健師、看護師、臨床心理士、保育士等の専門職者が参加した。スタッフの担当は以下の通りであった(表1)。

表1. スタッフの配置

教室運営総責任者：1名
・講習会プログラムリーダー：1名
・子どもプログラム担当者：1名、
・記録・事務係1名、
・子どもプログラムサブリーダー：2名
・専門職、支援者：20-30名

専門職、支援者(ボランティア)については、すべて登録制になっており、それまでの経験を考慮して、子どもの介助者ファシリテーターなどに割り振った(表2)。

表2. 専門職・支援者の配置

<講習会プログラム>
・講習会プログラム担当者：1名。 司会進行(小児科医、保健師、看護師、臨床心理士等の大学教員など)
・ファシリテーター：5~6名、 教育プログラム研修生(保健師、保育士及び大学院生など)
<子どもプログラム>
・インストラクター：2名。 プログラム企画(通園保育士、幼稚園教諭、作業療法士など)
・ボランティア(支援者養成プログラム生)：20~25人(高校生、専門学校生、大学生、社会人、子育てサークル・NPO関係者)

講演終了後、4~5グループに別れて話し合いを行ない、内容についての意見交換や、家族同士での情報交換を行うようにした。保育士、保健師などの専門職種をファシリテーターとして各グループに1人配置し討議の活性化を図った。ファシリテーターは自分の意見を前面に出さずに聞き役に徹するように指導した。

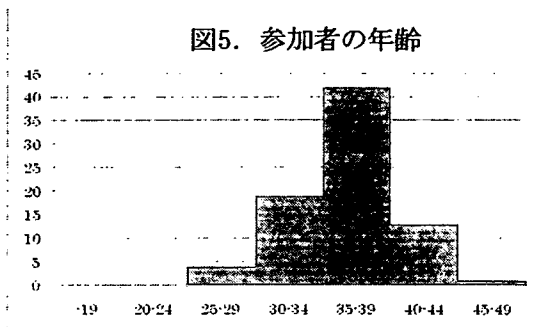
## C. 結果

### 1. 参加者の内訳・反応

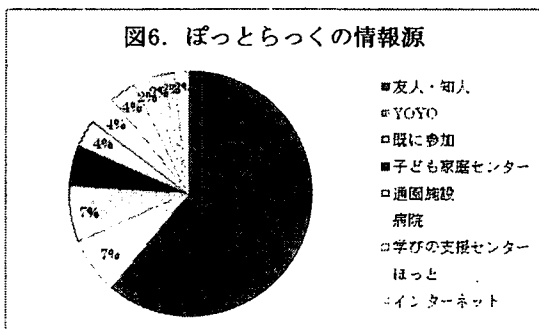
・参加した家族は圧倒的に母親が多かったが、毎回数名の父親も参加していた。

・参加した家族の多くは20代後半～40歳前半で、30代後半が最も多かった。

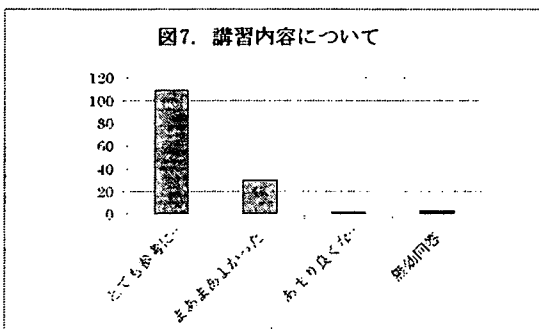
(図5)。



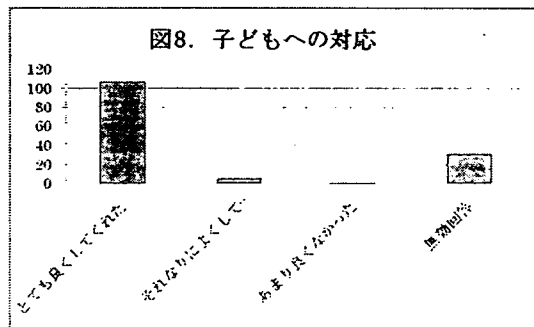
・発達支援教室の情報は、病院や YOYO クラブ（極低出生体重児の親子教室）、子ども家庭センターから得られた例も見られたが、口コミで友人から聞いた場合が圧倒的に多かった。（図6）。



・講演内容については、ほとんどが「大変参考になった。」「まあまあ良かった」と肯定的にとらえていた（図7）。



・子どもプログラムのテーマについても概ね満足していた。また、託児中の子どもへの対応については、ほとんどの家族が高く評価していた（図8）。



## 2. 支援者（ボランティア）

発達支援教室事業では、支援者（ボランティア）の役割が極めて大きい。「なだぼっとらっく」では、大学の子育て支援センターという性質もあって、支援員のほとんどが大学生によって占められていた。神戸大学をはじめ、近隣の5大学、1専門学校から大学生、大学院生が参加していた。その多くが、保健師、臨床心理士、保育士、作業療法士などをめざす学生であった。

表3. すまいるぼっとらっくの支援者

職業	割合
大学生	48%
子育て支援員	18%
専門職者（社会人）	17%
専門学校生	8%
高校生	3%
NPO職員	1%
その他	5%

一方、「すまいるぼっとらっく」では、地域の子育て支援ネットワークの協力を得ているため、多様な人々が支援者として参加していた。ここでも大学生が支援者の中心を占

めるものの子育て支援員や保健師、保育士などの社会人がかなりの割合を占めていた。また、一部ではあるが高校生も参加していた(表3)。

#### D. 考察

保健師、保育士に望まれる資質としては、単に発達障害に関する知識だけではない。

子どもの発達段階を評価するとともに、家族を支え、さらには、一つのプログラムを企画し遂行する能力が望まれる。

発達支援教室では、子どもプログラムの介助者としては、1) 担当の子どもを通じて発達障害の特徴を実際に経験すること、2) 危険な行動を制止する場合の基本やパニック時の対応、3) 発達状況の把握、4) 介助記録の記載方法などを学ぶようにした(図9)。また、講演会プログラムのファシリテーターとしては、家族の気持ちを理解しつつも、より多くの人々から意見を引き出し、纏めていく能力を求めた。

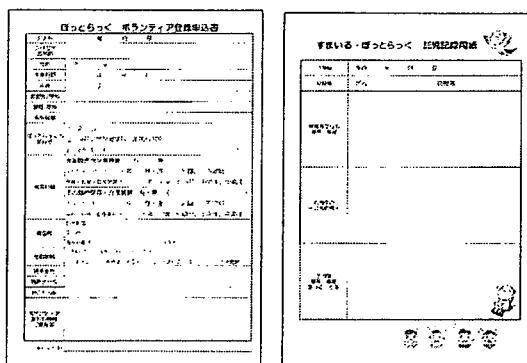


図9. ボランティア登録と子どもプログラムでの記録用紙

さらに、企画スタッフとしては、プログラムの企画・必要な器具の準備、会場や外部講師との渉外などより複雑な役割を要求した。(図9)

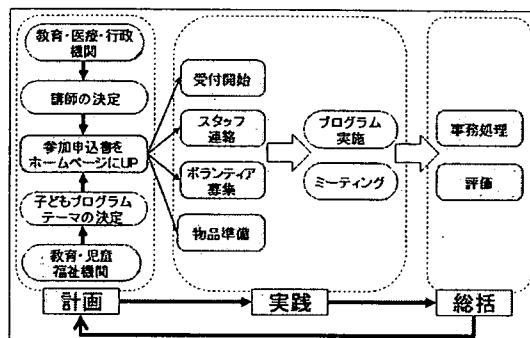


図9. 教室の企画と実践の流れ

教室の統括責任者は、これらの役割を個々の臨床経験年数や支援教室での経験回数から割り振っていかなくてはならない。

12回のクールを終えた支援者は専門職者と混じって、教室全体の運営責任者や各パートのリーダーとして企画業務に携わるようにしている。多くの分野の専門家が一緒になって取り組むこのような教室は、チーム医療、チームアプローチを学ぶ上でも大変有意義なものとなっている。また、「すまいるぽっとらっく」では、支援者として高校生や地域の子育て支援ネットワークのメンバーを取り込んでいる。子育て支援ネットワークのメンバーの多くは、既に自分自身の子育てを終えた熟年世代であった。今後は、地域コミュニティの中に質の高い支援者集団を養成することが重要となってくる。高校生にとっては、大学生や専門職者と一緒に活動することによって「働くこと」の意義を見つける機会になりうと思う。講習プログラムの話し合いの中で、年配の方が自分自身の子育て経験を話されることもしばしばみられた。また、「この活動に参加して初めて発達障害の子どもを育てる大変さがわかりました。」との声が寄せられたりしている。年齢や経歴の異なる

人々がボランティアとして集い、その中で自然と会話が生まれてくることは、コミュニティ再生という点からも大きな意義を持っている。一方で、(1) 学習の長期的な効果がどのようなものであるか、また、(2) 経済効率を含めた教室の評価をいかに行うか、(3) その場合の客観的な指標としてどのような観点を考えればよいかということは、今後の大きな研究課題と思われる。

私たちはこれまで発達支援教室を運営してきた経験を生かすために発達支援教室運営マニュアルを編集した。もちろん地域によって状況は異なると思うが、それらの部分を適時に修正すれば役に立つと思う。このような教室が全国に広がることを願っている。

#### E. 結論

発達支援モデル教室の活動は、子どもたちと家族だけではなく、専門職教育、支援者養成にも有用であった。これまでのモデル教室の経験をもとに発達支援教室運営マニュアルを作成した。地域の実情に合わせてカスタマイズすれば大変有用と考えられる。

#### F. 健康危険情報

該当なし

#### G. 研究発表

##### 【論文発表】

1) 高田哲 軽度発達障害児によくみられる症状 小児内科(39) 171-173、2007

##### 【学会発表】

1) Takada S. Experience on interdisciplinary

cooperation network for profound handicapped children's care in Kobe. Chinese Association of Early Intervention Programs for children with Developmental Disability. 2007 September 29-30th (Taipei) Taiwan

2) 高田哲 軽度発達障害について 兵庫県小児科医会 第48回小児医学講座 2007年12月8日 神戸

3) 高田哲 障害のある子どもと家族への支援 -神戸大学の地域連携事業として- 滋賀県小児保健学会 10月6日 滋賀県守山市

4) 高田哲 発達障害の早期診断と支援 第18回ハイリスク児フォローアップ研究会 講演 2007年5月20日 東京

5) 高田哲、松田宣子、山根弘子、他. 家族教育と専門職教育を同時に行う発達支援モデル教室の運営 第54回日本小児保健学会 2007年9月20-22日 前橋

##### 【シンポジウムなどの講演】

1) 高田哲、保健師・保育士による発達障害児の早期発見・対応システムの開発 恩賜財団母子愛育会公開シンポジウム 2008年3月7日

2) 高田哲 発達に遅れを持つ子どもたちへの支援 第4回ダウン症療育研究会 2008年2月23日 尼崎

3) 高田哲 発達障害のある子の家族、支援者へのアドバイスの仕方 日本小児神経学界 第2回プライマリケア医のための子どもの心の診療セミナー 2008年2月10日 神戸市

4) 高田哲、保健師・保育士による発達障害児の早期発見・対応システムの開発 厚



生労働省雇用均等・児童家庭局 母子保健課勉強会 2008年1月30日 東京

5) 高田哲. 発達障害児と家族のための支援教室運営とその課題 厚生労働科学研究補助金事業(子ども家庭総合研究)公開シンポジウム 神戸

6)

7) 高田哲 障害のある子どもやハイリスク児家族への発達支援—大学と自治体との連携—赤ちゃん成育ネットワーク第3回研究会 2008年1月13日 東京

8) 高田哲. 発達障害の診断と支援. ヤンセンファーマ株式会社社内研修会 2007年11月26日 神戸

9) 高田哲. 発達障害の診断をめぐって—家族支援の立場から— 神戸市発達障害支援ネットワーク 講演会 神戸市発達障害支援ネットワーク主催 2007年11月3日 神戸

10) 高田哲. 発達支援ネットワークの構築について 大阪市家庭相談員研修会 2007年10月19日 大阪

11) 高田哲. 気になる子ども 三木市教育センター研修会 三木市教育委員会主催 三木市 2007年9月15日

12) 高田哲 発達障害の理解 兵庫県音楽療法士認定審査講習会 2007年6月22日 兵庫県主催 神戸

13) 高田哲. 特別な支援を必要とする子どもたちの子育てをどう支援するか 大学コンソーシアムひょうご 2007年6月17日 神戸

14) 高田哲. 発達障害の早期診断と支援 沼津市学校保健研究会 特別講演 2007年5月10日 静岡県沼津

## II. TEACCHモデル教室「ほっと」

### 1. 対象幼児

「ほっと」は平成17年9月に灘区の「あーち」に開設して以来、2年7か月を経過した。この間、半年単位で4名ずつの就学前の広汎性発達障害と診断された幼児を対象に、5期20名の個別の療育を行った。

また、平成19年7月から須磨区のすまいるプラザ大黒において、「すまいるほっと」を開設し、同じように4名の幼児を受け入れ、現在2期目に入っている。灘、須磨両教室の幼児の内訳をみると、年齢では、4歳児が最も多く、続いて3歳、5歳の順であった。

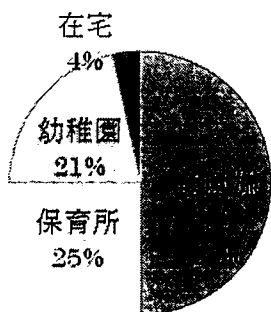
表1 参加幼児の年齢内訳 総数28名

2歳	3歳	4歳	5歳
1名	7名	15名	5名

就学前施設への所属は通園施設が半数を占め、保育所・幼稚園がほぼ同じぐらいだった。保育所では障害児保育の対象として支援を受けているケースがほとんどであるが、幼稚園では指導者の加配のないケースが多かった。

表2・図1 就学前施設の所属内訳

通園施設	保育所	幼稚園	在宅	総数
14名	7名	6名	1名	28名



入級児の性別は男児23名に対して、女児

5名である。

活動に先立ち、保護者に生活スキルチェックリスト(資料1)の記入等を提出してもらい、また、第3期(平成18年度)からPEP-R(心理教育プロフィール改訂版)検査を実施して、客観的な評価を行っている。これらをもとにして、個別の指導計画(資料2)を立てて、各幼児の発達段階と興味・関心にあわせた課題を準備している。

表3 3年間の教室開催回数

期	療育教室(含PEP-R)	
灘	1期	22回
	2期	17回
	3期	19回
	4期	19回
	5期	18回
須磨	1期	17回
	2期	※ 6回
合計	118回	

※須磨2期については、2月末現在回数

### 2. セッション

活動メニューは①はじめの会、②課題、③おやつ、④遊び、⑤終りの会である。活動場所を構造化し、各エリアの入り口にスケジュールカードを入れるボックスを設置した。スケジュールに従って、自立的に活動できるように支援した。

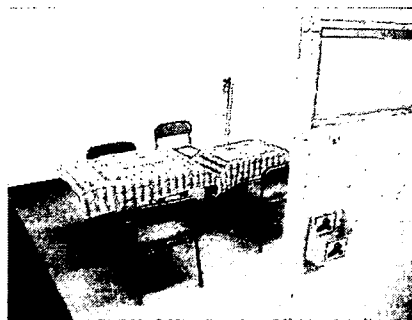


図2 構造化されたスナックエリア

各活動の終了時にトランジションカードを渡し、それを持って、スケジュールボードのあるトランジションエリアへ行き、次の活動を確認する。これにより、ほとんどすべての幼児は数回のセッションを経ると活動の流れを理解し、落ち着いて参加することができるようになった。

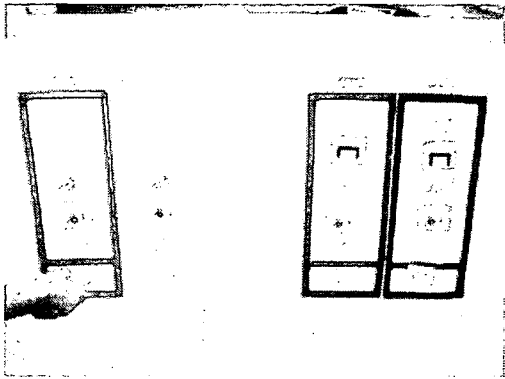


図1 スケジュール・ボード

「はじめの会」、「終わりの会」は集団活動の場として設定し、歌や手遊びに親しみ、また、簡単なあいさつや、やりとりによりコミュニケーションの練習をした。今何をしているのかがわかりやすいように、絵や写真を用いて、視覚的な手がかりを与え、理解を助けるよう工夫した。

図2 はじめの会 (灘・須磨)



「課題」は一人ずつパーテーションで仕切って構造化された課題エリアで行った。左の長机に課題の入ったトレイを並べ、順に学習机に持ってきて仕上げるように配置した。仕上げた課題は右のフィニッシュボックスにしまうという、「ワークシステム」を活用した。その結果、課題の流れと量を一目で把握することができた。課題はスモールステップで興味のあるものを毎回準備し、セッションの後の反省会で、次回の課題を検討した。

図3 課題エリアの構造化 (灘・須磨)



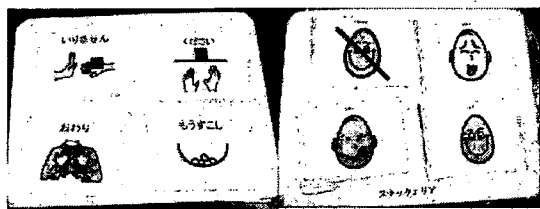
「おやつタイム」は、おやつを要求するというコミュニケーションの学習の場として、活用した。はじめは実物に手をのぼして取ろうとしていたのが、カードで要求することを学び、落ち着いてカードを指さして、ほしいお菓子を選ぶことができるようになった。また、自発的な言語表出のない子どもがカードを使うことで、「おいしい」とか「もっとください」などを伝えたり、

言えるようになるなど、コミュニケーションマインドが育った。さらに、「すわって食べる」や「落ちたものは食べない」など、食べるときのマナーも同時に指導した。

図4 おやつタイム (灘・須磨)



図5 スナックタイムの  
コミュニケーション・ボード

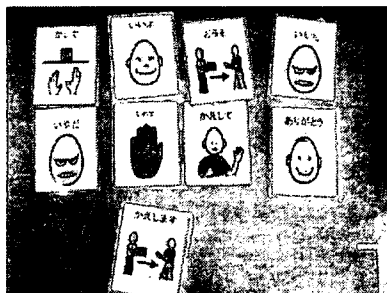


遊びの時間は毎回違う数種類の中から好きなことを選んで遊ぶようにして、余暇スキルを広げるように支援した。また、友達とおもちゃの貸し借りや順番に遊ぶためのソーシャルスキルを学んだり、遊びのじゃまをされたり、おもちゃを取られたときに使う表現（「返して」や「やめて」などのコミュニケーション）を教える場としても活用した。

図6 あそび (灘・須磨)



図7 あそびタイムの  
コミュニケーション・ボード



### 3. 自作教材の開発

一人ひとりの発達段階と興味に合わせた課題をきめ細かく用意し、楽しく、集中して取り組むことができるよう配慮した。このため、ボランティアの協力も得て、教材の開発につとめた。たとえば、各種の「プットイン」の課題（ゴルフボール、ポーカーチップ、ドミノの板、ビー玉、ストローなど）、仕分け箱（2種類～4種類）、ゴルフティーのペグさし、ブロックの積み上げ、木玉の針金移動、ペットボトルのふたしめ、ボタン、スナップの課題、ファスナー、S

字フック、輪ゴムひっかけ、洗たくばさみ、  
ファイリング課題、絵と文字のマッチング、  
量の課題、ひらがなによる名前の構成など  
である。

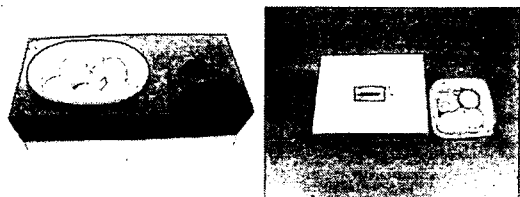


図 8-1 プットイン課題 (左ゴルフボール  
右 ポーカーチップ)

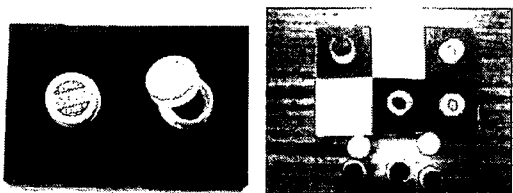


図 8-2 ふたしめ課題 (左 2 個 右 6 個)

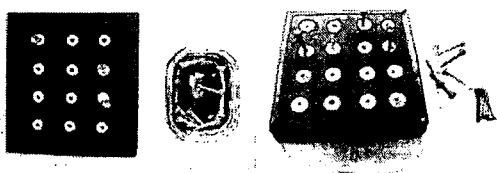


図 8-3 ゴルフティーのペグ (左 単色  
右 5色)

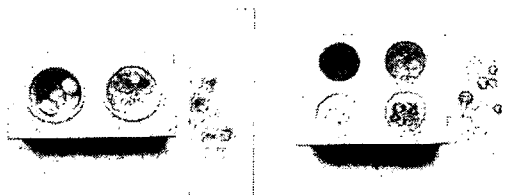


図 8-4 仕分け箱 (左 2 分類 右 4 分類)



図 8-5 スナップ・ぼたん

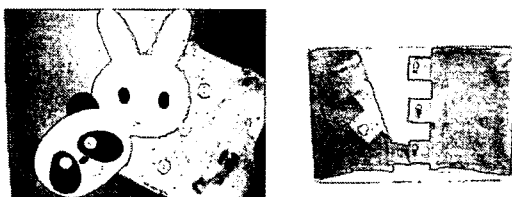


図 8-6 左スナップ・ぼたん 右 ほっく



図 8-7 左ファスナー 右ひも結び

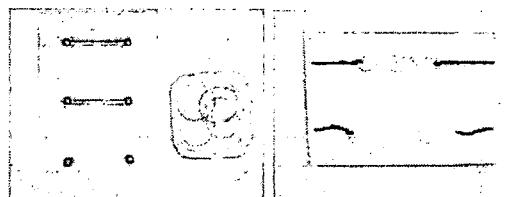


図 8-7 左輪ゴム掛け、右 S 字フック

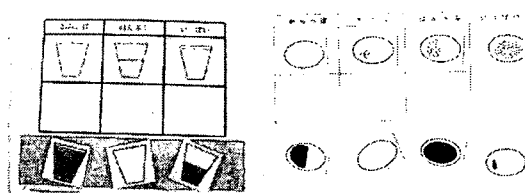


図 8-8 量の課題 (左 3 段階、右 4 段階)

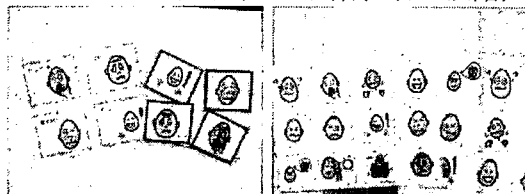


図 8-9 感情表現マッチング

(左 4ピース 右 12ピース)

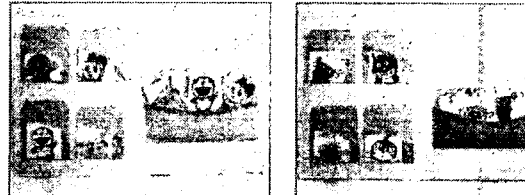


図 8-10 カードのファイリング

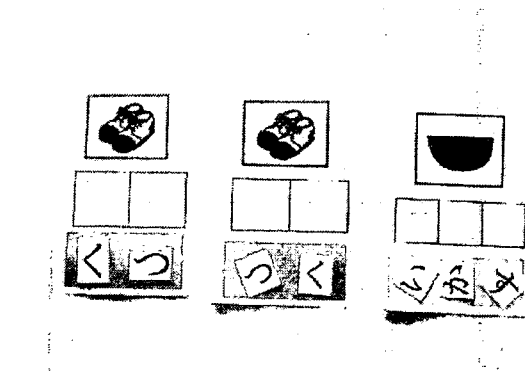


図 8-11 文字と文字のマッチング (左)  
と文字と絵のマッチング (中央・右)

#### 4. 支援者の育成

ボランティアとして、保健師・看護師を目指す医学部保健学科の学生や、教員をめざす発達科学部の学生をはじめ、社会人も参加し、自閉症の子どもへのアプローチのしかたを学んでもらう機会を提供した。ボランティアは教材の制作、教室の設営、セッションの実習、自由遊びの指導などを行い、教室終了時ミーティングにおいて、各幼児の変化と成長を確認したり、指導法に対する意見を出しあって、障害特性への理解を深め、支援法を学んだ。



図9 ミーティング

表4 参加したボランティア数（延人数）

期	参加人数（スタッフを除く）			
	学生	総数	1回あたり人数	
灘	1	114 (74%)	155	7.4
	2	56 (58%)	96	6.0
	3	62 (48%)	130	7.2
	4	55 (37%)	150	8.3
	5	64 (38%)	167	9.8
須磨	1	61 (66%)	92	5.8
	2	23 (59%)	39	7.8
合計	435 (52%)	829	7.5	

※H20年2月末現在

授業の空き時間に参加する学生ボランティアは時間割の変更や卒業で、半年を超えて参加するのは難しい。しかし、参加した学生はいずれも熱心に取り組み、回を重

ねるごとに、自閉性障害への理解を深めた。

また、卒論のテーマとして「自閉症の研究」を取り上げる保健学科の学生もいて、教室に通う保護者へのインタビュー調査を実施して、論文をまとめた。平成19年度は、3名の学生が卒論をまとめたが、それぞれのテーマは以下のとおりである。① 幼児期の自閉症児を持つ母親のエンパワメントに関する研究 ② 自閉症とその家族への専門的支援のあり方について～TEACCH 訓練に通う自閉症児の母親へのインタビュー ③ 幼児期の自閉症児・アスペルガー障害児をもつ家族が就学に向けて必要としている援助について

#### 5. 保護者支援

セッションを参観してもらい、自閉症の子どもへの接し方、支援のしかたをメモを取りながら、学んでもらうとともに、子どもの成長を確認してもらった。



図10 セッションを参観する保護者

②ペアレント・カウンセリングを行い、家庭での支援のしかた、支援グッズ作成の実習、利用できる制度・施設の紹介、参考図書を紹介と貸出などを行うほか、個別の相談に対応し、アドバイスをしたり、支援ツールを作成した。支援教室を卒業した子どもの保護者の中には、ボランティアとして、引き続き支援教室に参加し、ペアレント・

メンターとして、保護者支援に協力している。(6名)

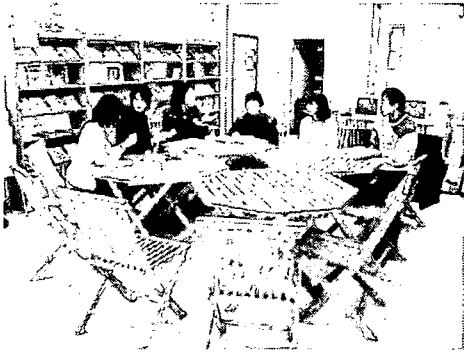
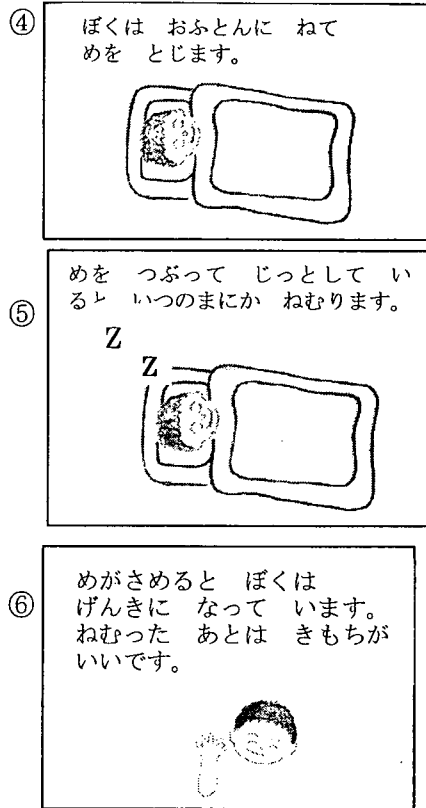
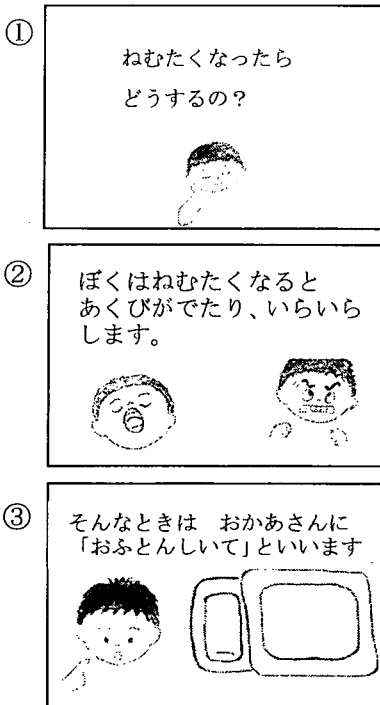


図 11 ペアレント・カウンセリング

保護者からの個別の相談の中には、さまざまなこだわりから、家庭でパニックになったり、生きにくさを感じていること、また、トイレトレーニングがなかなか進まないことの悩みが出された。これに応えるため、各幼児の認知力にあわせたソーシャルストーリーやカードなどを作成し支援した。そのうちのいくつかを以下に例示する。

事例① 眠たくなるとぐずって泣くがそのうち大泣きし始めるという4歳の子どものために書いたストーリー

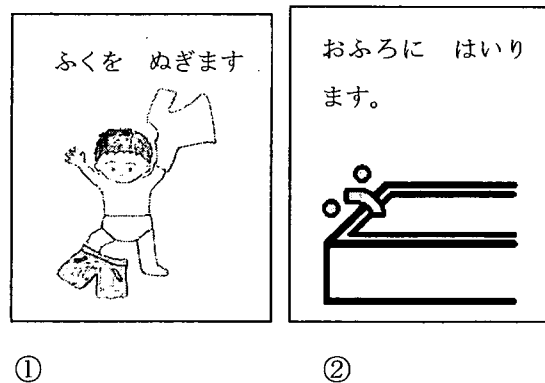
図 12 眠り方のストーリー



このストーリーを読むと、眠くてもぐずらずに母親に「おふとんしいて」と言うようになり、ふとんを敷いて横になると、目をつぶって寝ようとするようになったと聞いた。

事例② おふろに入っている時、何度も服を脱ぐところからやり直そうとする4歳男児のために書いた入浴手順

図 13 入浴手順





③



④



⑤



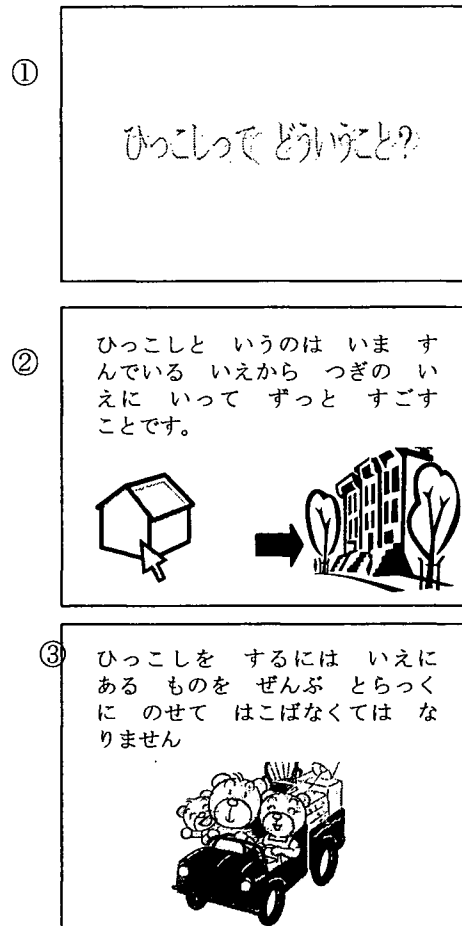
⑥

この手順書を見て、入り直しを要求しなくなり、保護者も落ち着いて一緒に入浴できるようになったとのことだった。視覚支援が有効であることを実感した後、この保護者はカレーの盛り付けで、ご飯から少しでもカレーのルーがはみだして、皿につくとパニックになるのを解決するため、簡単なカレーの絵に「カレーはお皿についてもだいじょうぶ。おいしく食べることができます。お皿はカレーを食べた後で洗えばきれいになります」と書くと、すんなり食べてくれたと喜びを伝えてくれた。このことがあって、何かあるたびに、工夫してストーリーを書き、こだわりを一つずつ解消し、親子とも生活がとても楽になったと喜んでいいる。そのことはまた、保護者の気持ちを明るくし、子どもへの愛着を強める結果にもなっている。

事例③ 自閉症学習会に参加していた、ある家庭が引越しを予定していたが、場所へ

のこだわりが強い4歳児があたらしい住居へスムーズに引越すことができるかどうか、保護者は不安を感じていた。実際、自閉症の子どもは、同一性保持への強いこだわりから、住む環境ががらっと変わってしまうことは、とうてい受け入れがたいものである。そこで、引越しとはどういうものか？いつ引越すのか？引越したあと、この家はどうなるのか？あと何日で引越すのか？自分の服やおもちゃはどうなるか？どんな家に引越すのか？などの疑問にこたえる内容で、ストーリーを書き、事前に何度も見せてもらうことにした。その結果、大した混乱もなく、数日を経ずに新しい住居に適應することができたとのことだった。

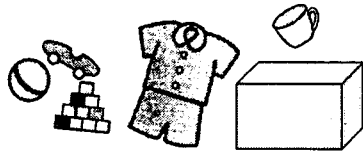
図 14 引越しのストーリー





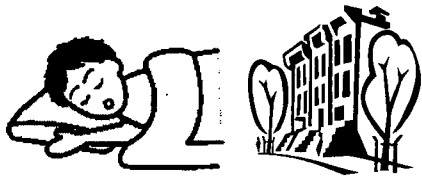
④

ぼくの ふくや おもちゃや こ  
つぷも はこに 入れて はこび  
ます。



⑤

つぎの いえに ぜんぶ はこんだら  
そこで まいにち おとまりします。も  
う この いえには かえりません。



⑥

この いえには かぎが かかって  
はいれなく なっています。ぼくは  
この いえに さようならをします。



⑦

つぎの いえで ぼくは おかあさ  
んと ふたりで くらします。



⑧

3月10日はひっこしです。  
ようちえんに あさ いって つぎの  
いえに かえります。



⑨

この いえで ねるのは  
あと 3かいです。



⑩

この いえで ねるのは  
あと 2かいです。



⑪

この いえで ねるのは  
こんやが さいごです。



⑬

きょうは ひっこしです。ようちえ  
んが おわたたら つぎの  
いえに いきます。

きょうから  
まいにち つぎ  
の いえで あ  
そんだり ごは  
んを たべたり  
おとまりします。



ストーリーを作るときの留意点として、そのことを知って「安心する」、「落ち着いて過ごせる」ということを目指した。このため、①わかりやすい言葉を使い、また、イラストや写真を入れて、ストーリーの理解を助けるよう工夫した。(イラストの家やマンションは実際の写真を使った) ②具

体的に引越しの日を知らせた。(スケジュールの提示による、時間の構造化) ③あと、何日で引越すのかをわかりやすく、寝る回数で示し、カウントダウンしていく形で、心の準備をさせた。また、引越し先が新築ではないので「新しい家」ではなく、「つぎの家」と表現し、誤解を生じないように配慮した。


事例④「袖をあげて手を洗う」のを教えたいとの希望があり、これもストーリーを作成して使ってもらったところ、神妙な顔でストーリーを聞き、手を洗う段になったとき、「おかあさんが そでを あげるのを てつだってくれます」と言いながら、袖を上げさせてくれたとのことだった。

図 15 手洗いのストーリー

① どうやって てを あらえば いいの？




②



ながそでの ふくを きているとき てを あらうには そでを うえに あげます。おかあさんが そでを あげるのを てつだってくれます。

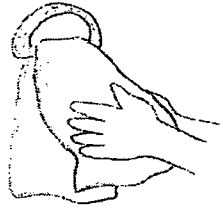
③ そでを あげないままで てを あらうと そでが ぬれます。



④ そでを うえに あげて いると そでは ぬれません。



⑤



てを あらった あと たおるで ふきます。ては きれいに なりました。

⑥



てを ふいたあとで そでを おろします。てを あらったあとは きもちいいです。

ストーリーを書くときの留意点として、なぜ袖をあげるのか？袖をあげなかったらどうなるのか？を説明し、手を洗った後で、袖は元通り下ろすのだということを伝えることで安心させたいと思った。また、「手を洗ったらきもちいい」というポジティブな表現を使って、ストーリー全体の雰囲気心地よいものにした。

その後、本児はカードやストーリーを見るのをとても楽しみにするようになり、いろんなカードを積極的に見て、不適応行動を改善することができるようになったと保護者はよろこんでいる。

## 6. 学習会

保護者や支援者を対象とする、5回シリーズの自閉症学習会を灘・須磨の両方の教室で実施した。灘では各回、平日と土曜日の2回ずつ開催し、保護者、支援者の利便をはかった。また、須磨は月に1回、水曜日に実施した。テーマは灘・須磨ともほぼ同じ内容であるが、灘ではスタッフとして参加する、自閉症児をもつ保護者が、「家庭での支援」について第3回の学習会で話した。一方、須磨では、第1回に自閉症の障害特性を取り上げた。

表5 テーマ

灘	須磨	テーマ
	1	自閉症ってどんな障害？
1	2	コミュニケーションの力を付けるために～視覚支援の意味と方法～
2	3	ソーシャルスキルを身につけるために
3		家庭でできる構造化と視覚支援
4		不適応行動に対処するために
5		自立をめざして～自己選択・自己決定の力をつけよう～

表6 学習会参加者数(延人数)

		保護者	支援者(内保育士)	計
灘	1期	53	51	104
	2期	46	74(22)	120
	3期	44	32(21)	76
	4期	53	98(69)	151
	5期	33	32(26)	65
須磨	1期	40	13(5)	53
	2期	45	12(2)	57
計		314	312(145)	626

3月7日現在(須磨2期は3回まで)

特に灘の学習会には保育士も多数参加した。また、保育所や通園施設、さらにボランティアや地域の集まりでの出前学習会も実施した。(H19.6 魚崎保育所、H20.1 ひまわり学園・のぼら学園職員研修 H20.2 丸山学園保護者会、H19.11 西宮プレイパーク、H20.3 須磨区ボランティアセンターなど)

### (6) 療育の事例

この3年間に灘と須磨の支援教室で療育した子どもの中から5例を取りあげる。

① 課題にひきつけられて、認知力を向上させた例

・その1 3歳 女児

入級当初：

教室に入れず、保護者が抱いて入室したが、大声で泣いて嫌がった。下におろすと、床に寝ころんでパニック状態になる。抱っこされて、情報コーナーでプットイン課題をなんとかすることができた。

療育の経過：

療育を始めて2か月を経過したところから、課題の意味を理解し、型はめ、プットイン、色別pegさしなどに落ち着いて取り組むようになった。ワークシステムを理解するようになると、トレイのマークを順番にマッチングしながら自立的に課題に取り組めるようになった。おやつの際は「ラムネおいしい」などと言えるようになった。遊びのレパートリーも増えて、アンパンマンブロックやくるくるチャイムなどのおもちゃで、楽しく過ごした。

・その2 3歳 男児

入級当初：

あちこち探索し、走り回る。母親から離れられず、課題は母に抱っこされてするこ

ともあった。また、わからなくなると、すぐ課題エリアから出ようとした。ふらっとでは、水遊びをやめられず、母に叱られると、そのことを楽しんでる様子だった。

#### 療育の経過：

はじめの会で呼名されると「はい」と返事ができるようになる。また、写真と名前とのマッチングができた。課題ははじめのうち見比べる力が弱く、パズルもスムーズにできなかつたが、しだいに認知力が向上し、しっかり見比べて完成できるようになった。課題を楽しみにして、集中して次々にやりあげようになった。数字やひらがなにも興味を持つようになり、自分の名前をひらがなカードで並べられるようになった。課題に意欲的に取り組む中で、母親から離れて活動することもできるようになった。おやつのはカードを見て好きなおやつを選ぶことができた。遊びはプラレールのレールをつないだり、電車で遊ぶのを楽しんだ。

② 構造化された環境で落ち着いて課題に取り組めるようになった例

・ 4歳 男児

#### 入級当初：

集団活動には参加できず、違うところに行く。音声言語による指示はほとんど入らずやりとりは成立しない。母親を絶えず確認しないと落ち着かない。

#### 療育の経過：

4回目ぐらいからスケジュールを理解し、自発的に行動することができるようになった。課題ははじめのうちは隣のブースの音が気になり、自分の課題に集中することができなかつた。次第に課題に興味を持つようになり、順番どおりに最後まで取り組

むことができるようになった。構造化された環境とわかりやすいワークシステムの活用で、集中して活動できるようになり、プットイン、色・形の弁別、型はめなど、次々に仕上げていった。おやつのは「おかきちょうだい」「ジュースちょうだい」などとても小さい声だったが要求をつたえようとしていた。「おいしい」「まずい」のカードを見るのが好きで、コミュニケーションの学習にも興味を示した。

③ 認知力の向上により、自己刺激が見られなくなった例

・ 4歳 男児

#### 入級当初：

教室に入るのを渋り、座り込んで泣いた。認知発達の面でも遅れが大きく、実物と写真カードのマッチングはできなかつた。ゴルフボールや積み木のプットイン、木玉の針金移動など簡単なものから始めた。板状のものを指の間にはさんで感覚遊びをするため、型はめなどはパーツで遊び、型にはめるところにいかない。遊びの場面でも自己刺激にふけることが多く、なかなか遊びが広がらなかつた。

#### 療育の経過：

しだいに課題に興味をもち、集中して取り組むようになった。離席もほとんどなく、落ち着いて過ごせるようになった。課題もカラーマッチングや仕分けができるようになり、型はめも感覚遊びをやめて、形を見比べてはめようとするなど、認知力の向上が見られた。集団活動への参加はボランティアの膝に抱っこされて参加できるようになった。名前や写真を黒板に適切に貼ることができるようになった。欲しいおやつのはカードを選択してトントンと指差し、